

『ちくま評論選』解説

22 幕末における視座の変革

丸山眞男まさお

■凡例

- 1 ①②：は形式段落番号。◆は、設問。 2 ▽は、本文の追跡・分析。
3 ▼は、読解に関する技法。 4 ☆は、記述に関する技法。

■前提知識

前提知識が必要な文章が続いている。厳密には、特定の知識がないと理解できないような文章は、国語では取り扱わない。しかし、実際には、知識の助けによって理解の早さや正確さが増すことは多い。ほんとうのことをいうと、文章の読解は、知識の厚みによって左右される。心理学的にいっても「知識で読んでいく」というのが正しい。読解のための汎用能力というようなものがある、それがすぐれている人が言語の力がある、と思われているかもしれないが、実際は、歴史の話は歴史の知識によって、芸術の話は芸術の知識によって理解しているというのが実態である。知っている話は読める、のである。英語の場合を思い浮かべてみよう。単語や文法は怪しいのに、知っている話だったから読めた、という経験はないだろうか。

しかし、これは逆にいうと諸君にとってチャンスである。高校三年生の終わり、すなわち受験期になって、現代文、古典、外国語の文章が、急に読めるようになってきたと実感する人が多いが（そうやってほしいが）、その理由の一つは、この時期になって、彼らの知識が加速度的に増していくからである。

「この話、政経で習ったぞ」「この発想、英語で読んだぞ」といったように、知識の系統がクロスオーバーし始める（最近、こういう言葉を諸君からよく聞くようになった）。科目ごとに孤絶していた知識が有機的につながり始める。さらに重要なのは、友だちと家族の間ぐらいで完結していた世界、世界観、発想が、別次元へ移動し始めることである。太田豊太郎（舞姫）ではないが、「まことの自我」がうごめき始め、これまでより一段高く自由な場所からものが見え始める。すると、今まで何を言っているのかわからなかったような書き手の文章が、霧が晴れたように、わかるようになるのである。

先に、読解のための汎用能力など関係ない、というようにいかたをしたが、ほんとうは、関係がある。最終的には、この力が、未知のテキストを読み解いていく。しかし、そこには「単語と文法」というようなものだけでなく、具体的な知識のネットワークと、それらを統括する自在な視点がともなう。

これら結び合わせるのが、「知的好奇心」である。テストに出る文章が読めるためには、テストに出る文章が読めるようにという動機を一步はみ出た、「知的好奇心」世界はどうなっているのか、自分はどうな人間なのか、自分はこの世界でどのように生き、世界はどのようにあるべきなのか、を希求していく精神の芽生えを必要とする。かんたん（かんたん）という「わかりたい」という精神である。

さて、佐久間象山（一八一六～一八六四）信州出身。もともとは江戸で朱子学を修めた。しかし、四二年、主君の真田幸貫が老中海防掛に就任し、象山は顧問に抜擢される。当時はアヘン戦争の時代。海外事情を研究し、「海防八策」を幸貫に提出。象山は、洋学の必要を痛感し、三四歳でオランダ語を学び始め、二年で修得、自然科学書、医

書、兵書などをむさぼるように読み、洋学の知識を吸収した。五一年江戸で塾を開き、砲術・兵学を教え始めた。勝海舟、吉田松陰、坂本龍馬らが続々入門した。五三年、ペリー来航により藩の軍議役に任ぜられ、老中阿部正弘に「急務十策」を提出。一方、弟子の吉田松陰に暗に外国行きを勧めた。しかし松陰の海外密航は失敗、象山もこれに連座して、以後九年間の謹慎処分を受けた。この間、洋書を読んで西洋研究に没頭し、攘夷論から現実的な開国論に転じ、公武合体を唱えるようになった。解放後、上京した象山は、公武合体・開国を要人に説いてまわったが、その言動が尊皇攘夷の過激派の怒りを買って、斬殺された。享年五十四歳。

象山には、二つの「転向」がある。一つは、朱子学→洋学。もう一つは、攘夷論→開国論。あとの本文を読めばわかるが、しかし、いずれも原則がころりと変わってしまったというものはなく、ある種の「一貫性の上になされた転換であった」。

象山の思想は、「東洋の道徳」と「西洋の芸術」が合体したものである。「東洋の道徳」とは、人間の内なる理（倫理）であり、「西洋の芸術」とは、アートのことではなく、人間の外なる天地万物の理（物理）のこと。今風にかんたんというなら、人文系の精神科学と自然科学が一つに結びついているものである。（参考『日本大百科全書』）
ついでに、筆者丸山眞男は、教科書にあった『であること』と『すること』の筆者。超ビッグネーム。

■見通しと追跡

◆【問い】距離をおいた認識と分析とはどのようなものか

① ● 距離をおいた認識と分析というものが、もっとも必要でありながら、実はもっとも欠けやすいのは激動期の政治状況についての認識であります。というのは申すまでもなく、政治の世界では敵味方の対立がきわだち、それだけ好悪や激情、あるいは希望的な観測が状況認識のなかに介入してくるばかりでなく、そこでは、きのうの敵はきょうの友となり、うそからまことが出てくる、というように◆1 転変常ならぬ世界だからであります。

▽（見通し）を立てよう。「距離をおいた認識と分析」というものが、必要、これが問ではないか。もっときちんとするならば、「距離をおいた認識と分析はどのようにして可能か」。なぜって、すぐ後に、「政治状況に対する、距離をおいた認識と分析って、とってもむずかしいんだよ」って書いてあるから。なぜ、むずかしい？ なぜって、みんなカッカしちゃうんだよ、政治の話にはね。冷静になるのはむずかしい。

ちよっとだけ、最終段落をカンニングしよう。
「象山の、政治的状況に対する対応が、どんな場合にも一貫した主知的なリアリズムの思考法によって裏づけられている」なんて書いてある。どうも「政治状況に対する、距離をおいた認識と分析」のお手本が、〈象山先生〉のやり方の中にあるようだ。それは何だろう。それを読み取ろう。そういう姿勢でいけば、よいのではないか。これが、スタートに当たったの（見通し）である。

◆問1 「転変常ならぬ世界」とはどのような世界か。

直前の「そこでは、きのうの敵はきょうの友となり、うそからまことが出てくる」

という表現を、整頓して示す。じつは、ちよつといいにくいかもしれない。解答例に示した「関係や判断が」といったまとめ方ができるかどうか。抽象語を自在に使えるようにしておく、☆整理して示す型の記述に役立つ。

「解答例」「これまで敵対関係だったものが突然友好関係に転じたり、これまで真実ではないとされていたことが、突然真実だということになったり、関係や判断がめまぐるしく変わってしまう世界ということ。」

◆【答】象山のリアリズム（同じ根拠から、正反対の政治行動が生まれる可能性を認める）

② ●象山のいろいろな上書などを見て、今日でも政治の思考方法として学ぼうと思われ点の一つは、政治的な状況を好悪を離れて冷徹に認識し、またそのなかに含まれた矛盾した発展方向をつかまえる眼であります。たとえば天保十三（一八四二）年の松代藩主、真田幸貫への上書でありますが、これは、彼がまだありきたりの攘夷論にとらわれていた時代の上書として知られております。ところがよく見ると、早くもそこで彼は、政治状況に対する、◆2リアルな認識方法とはどういうものか、という一つのモデルを示しております。そのなかで彼はこう言っております。——日本に対してイギリスは野心をいだいていることは疑いない、漂流民などを通じてもっともらしいことをわが国に申し送ってくるけれども、実はそれは謀略であって、兵威をもって朝廷をおどかして、そしてかねて望んでいる貿易をしようとしているのがねらいである。こういう手につてはいけない、と。これを通り一ぺんに読めば、当時のきわめて◆3ありきたりの夷狄観であって、のちの象山が到達した開けた見方とは非常に違っております。しかしもう少しくわしく彼の論理をたどってみると、同じ上書で彼はこういうことを言っている。「抑彼国は唯利にのみ走り候習俗に有之候得ば、仮令本邦に深き讎怨有之候とも、本邦を乱妨仕候為のみに態々兵艦をしつらひ数多の入費を掛候て差向ひ候等の事は決して仕間敷候」と。つまり夷狄は義を知らない。道徳を知らない、ただ利益だけで行動する。しかしだからといって必ず日本に乱暴をしかけてくるとはいえない。どんなに日本に対して恨みをもっているとしても、あるいは日本をかたきのように憎んでいても、憎んでいるとか恨んでいるとかいうことだけによって、わざわざ金をかけて日本に乱暴してくるものではない。利益になると判断しなければ決して乱暴してくるものではない、ということであります。まずこれが第一命題であります。

▽「政治状況に対する、距離をおいた認識と分析」の例の一点め。英国は利益にならない限り、暴力を行使しない、という、冷静な分析と判断、これがそれである。連中は野心・陰謀の持ち主だ！その手に乗るな！いいなりになるな！というアツい議論とは別の、冷静な目がここにある。このアツいほうの声、現在も聞こえてきます。人間は何かに対してビビッているとき、ひっくり返って、強硬な声を上げるものようです。陰謀だ！という声の底には、間違いない、おびえがあります。

◆問2 「リアルな認識方法」とはどのようなものか。

☆傍線を延長して、「政治状況に対する、リアルな認識方法」というかたまりで見ると、「政治状況」「認識」「方法」というキーワードから、「今日でも政治の思考方法として学ぼうと思われ点の一つは、政治的な状況を好悪を離れて冷徹に認識し、またそのなかに含まれた矛盾した発展方向をつかまえる眼」という箇所が目がいくだろう。これを整頓する。

「解答例」「政治的な状況を好悪を離れて冷徹に認識し、そのなかに含まれた矛盾した発展方向をつかまえる方法」

※四〇字以内で、と制限がつけばどうなるか。私立大学が出しそうな問いである。

「解答例補」「政治状況を冷徹に認識し、そこに含まれている矛盾した発展方向をつかまえる方法。（三九字）」

◆問3 「ありきたりの夷狄観」とはどのようなものか。

夷狄^{いてき}＝外国人を、野蛮人と卑しめて呼ぶ語。

引用部分をまとめるわけだが、さて、きちんと整理しなくてはならない。

①日本に対してイギリスは野心をいだいていることは疑いない。
②漂流民などを通じてもっともらしいことをわが国に申し送ってくるけれども、実はそれは謀略。
③兵威をもって朝廷をおどかして、そしてかねて望んでいる貿易をしようとしているのがねらいである。

④こういう手につてはいけない。
彼らの目的は、貿易という利益追求だ（①③）。そのためには、謀略や暴力など手段を選ばない（②④）。このように、整理できる。これは「目的」「手段」を使った整理法である。④は主張なので、この答案に入れない。

「解答例」「イギリス人は、貿易による利益追求のためには、謀略や暴力など手段を選ばない野蛮人だという見方。」

③ ●さらに今度は、同じ上書のなかでこう言っている。「元来道德仁義を弁へぬ夷狄の事にて、唯利にのみ賢く候得ば、一旦兵乱を構へ候方、始終己れの利潤に相成可申と見込候はば、聊か我に怨なくとも何様の暴虐をも可仕候。左候得ば此方よりは礼法を以て待候義も、其怨のなき所を待み候事も出来兼候義と奉存候」。これは前の命題と一見逆のことをいっている。元来仁義道德をわきまえないで利だけで行動する夷狄であるから、たとえ日本になんの恨みがなくても自分の利益になると思ったら何をしかすかわからない、ということであり、ところがこの二つの命題は実は同じ認識から出てくる楯の両面であります。つまり、利益によって行動し、打算によって行動しているかぎりは、ただ日本を

恨んでいるから、日本を憎い国だから、といってやっつけにくるというものではない。しかし、まさに利益によって行動しているからこそ、日本に対してなんら恨みつらみはなくても、場合によっては日本に対して軍事力を行使するかもしれない——こういうことです。つまり、今日のことばに翻訳するならば、国家理性に基づく打算というものも近代外交の基礎だ。それは特定国を好きだとかきらいだとか、憎んでいるとかいい感じをもっているとかいう感情の次元とはまったく別なのだ。つまり利害の打算が行動の基準であるという、まさに同じ根拠から、正反対の政治行動が生まれる可能性がある——ということになります。このように一見非常に通俗的な夷狄観から出発しながら、そこから国際権力政治の◆4動態的な論理というものを彼が引き出していることに注目したいと思います。

▽先とは逆の論。先のものと並列してみる。

②「利益にならない限り、暴力を行使しない」（嫌いでも）

③「利益になるなら、暴力を行使する」（嫌いでなくても）

このように見ると、二つは論理的に同値であることがわかるだろう。

大衆は、今も昔も、どの国は嫌いだとか好きだとかいう。いわく、アメリカが好き嫌い。いわく、中国が好き嫌い。親米だの、親中だの、嫌日だの、嫌韓だの。しかし、政治がこの感情レベルに引きずられたとき、悲劇を生むのは歴史が教えている。「国家理性に基づく打算が外交の基礎」という視点を、象山がもっていたということを確認。

◆問4 「動態的な論理」とはどのようなことか。

☆傍線部延長術。「国際権力政治の動態的な論理」とは？ ☆何やそのままだんか式。「国際権力政治では、動態的な論理が働くということ。」動態的な、というのは、ダイナミックな、ということ、ある種の動きを示す。ここでの具体的な内容はもちろん、直前の「利害の打算が行動の基準であるという、まさに同じ根拠から、正反対の政治行動が生まれる可能性がある」というところ。かみくだいた解答例を示す。

〔解答例〕「国と国との駆け引きの場では、国益のためという同じ根拠から、状況によって、正反対の政治行動が選択される可能性があるということ。」

④ ●彼がここで提示した国際権力政治の論理というものは、西洋諸国は貪欲で道徳を知らないから、必ずわが国を征服しにくるにきまっているという伝統主義的な攘夷論者の論理とは違う。しかし、同時にまた、同じ人間じゃないか、同じ人間なんだから、こつちが親切にもなしてやればまさかひどいことはしないだろう、という情緒的な人間関係を軸にした、センチメンタルな仲よし主義的国際観とも違います。貪欲な、あるいは邪悪な相手だから必ずやってくる、というのは固定的な思考方法であります。しかし、同時に、みんな仲よくという円満主義でいけば万事めでたしめでたし、

というのも、これもまた逆の固定的な思考方法です。いずれにしても、これは政治的「相手」に対する固定した期待感、相手が必ずこういふふうに出てくるだろうという固定した期待感であります。流動する国際政治においては、固定した期待感にもとづく判断ほど危険なものはない。その期待というものがはずれると、いままで猜疑し憎悪していた敵に対して一転して無批判的に好意をもつようになる。きのうまでのフアナティックな攘夷論者がたちまち西洋にいかれてしまうというのがそういう例であります。逆に、相手に対する友好国としての固定した期待感があると、今度は期待が裏切られると、かわいさあまって憎さが百倍ということになる。◆5政治的リアリズムが欠けているほど、そういう情緒的判断に左右されやすいわけであります。

▽（やつらは無法者の暴力主義者だ）（彼らも話せばわかる同じ人間だ）、どちらも相手に対する固定的な期待を抱いている点で危険。前者は、否定的な期待、後者は肯定的な期待だけだ。

丸山が、彼の生きていた戦後空間を思い浮かべながら語っているのがよくわかる。「きのうまでのフアナティックな攘夷論者がたちまち西洋にいかれてしまう」という箇所は、「きのうまでの鬼畜米英と叫んでいた連中が、たちまちアメリカにイカれてしまう」と置き換え可能。また、「相手に対する友好国としての固定した期待感があると、今度は期待が裏切られると、かわいさあまって憎さが百倍」というのも、いくらかでも例がありそうだ。同じ社会主義国として、仲間であったはずのソ連と中国が、するどく意見対立するとか：（一九五〇年代後半、ソ連の平和共存路線に対して中国が反発）。

◆問5 「政治的リアリズム」とは、この場合どのようなものか。

リアリズム＝現実主義。

☆端的に、「固定した期待感をもたないこと」といえるだろう。しかし、物足りない。これでは、個人的な人間関係のことみたいだ。「期待感」が情緒的・固定的なものとして示されているので、「リアリズム」のほうは「現実的（理性的）」「柔軟性」といった言葉を補って対比したいところ。

〔解答例〕「（流動する国際政治において）憎悪や好意といった情緒的なものに基づく固定的な期待感をもたないで、現実的にかつ柔軟に相手国に対応しようとするもの。」

⑤ ●一つの事象のなかに含まれている矛盾した方向への発展の可能性というものを同時に扱っていくということは、これはきわめてむずかしいことでありませうけれども、とくに政治的指導者にとっては、こういう両極性の、あるいは多方向性の認識眼が必須の資質になります。そこにはじめて、自分の立場からして、一定の状況のなかにふくまれている、より望ましい可能性を少しでものびし、望ましくない方向への発展可能性を抑えていくような政治的選択——それに基づく政策決定が生まれてきます。〔読1〕政治は「可能性の技術」だというのは◆6そういうことです。それは、

理想、あるいは建て前はそれだけでも、現実……云々という論法で、現実と理想とを固定的に対立させ、既成事実にただ追従していく「現実主義」とは縁もゆかりもないものです。

▽「一つの事象のなかに含まれている矛盾した方向への発展の可能性」とはなんのことだったか。このように抽象度が高い形でまとめられたとき、つねに、具体的に戻つて確認していくこと。ぼんやりしたままで読み進めていくと、それが前提となつて続いていく後の議論について行けなくなる恐れがある。

ここは、③段落の「利害の打算が行動の基準であるという、まさに同じ根拠から、正反対の政治行動が生まれる可能性」を受けている。英国は、利益にならない限り、暴力を行使しないから戦争を急ぐな／利益になるなら、暴力を行使するから戦争の準備をせよ、というように、正反対の二つの政治行動が想定されるのである。

②にあつた「その（政治的な状況の）なかに含まれた矛盾した発展方向」というのも、このことを指している。

◆問6「そういう」とは何をさすか。
抜き出しでいい。「わかりやすく」といわれたときのための例も示しておく。

「解答例1」「一定の状況のなかにふくまれている、より望ましい可能性を少しでものばし、望ましくない方向への発展可能性を抑えていくような政治的選択をする」と。

「解答例2」「ある政治状況の中には、より望ましい可能性と望ましくない可能性が含まれているが、その両方を見定めた上で、望ましい可能性を実現に近づけ、望ましくない可能性を抑えるように政治行動を選択すること。」

◆【答】象山のリアリズム2（目的と手段）目的においては堅固だが、手段については自在

⑥ ●さらに、象山のリアリズムは、たとえば政治的認識における目的と手段との考へ方にも出ていると私は思うのであります。これも同じ上書から例を引きます。象山の比較的初期の資料にも、成熟した政治的思考がすでに萌していると思うからです。

西洋製の船艦御造立と申義、是迄公儀の重き御規定も御座候得ば、尤容易ならざる義とは奉存候得共、右の外に外寇防禦の策無之に極り候はば、仮令是迄如何程重き御規定御座候とも天下の安危には難替義と奉存候。畢竟御先代様にて右等重き御規定を被為立候も、天下後世の義を厚く被思召候ての御事に候へば、御当代様の御物数奇等にて右を被為破候はむには如何様にも済ませられまじき御義理に可有御座候得共、天下の為に立てさせられ候御法を、天下の為に改めさせられ候に何の御憚りか御座候べき

御先代様と此御時節と御代を替へさせられ候はば、必ず是迄の御法に限らせられ候義は有御座候被存候

⑦ つまり、象山のいいたいことは、昔の西洋と今の西洋とは非常に違う。鎖国政策を定めた御先代様も現在生きて現在の状況に直面していたらどういふ政策をとつたか、を考えなければいけない。巨船巨艦の建造を禁止するというのは、当時の鎖国

政策の基本であつたにちがいない。それはそのときの状況において、日本の独立を守り、外国から侵されないようにして天下の安泰をはかる、そういう目的のためにとられた政策ではないか。ところがその肝心の政策の目的が忘れられてしまつて、法度を守ることに自体が政治的伝統であるということになると、これは手段を目的ととりちがえることになる。つまり、先代があのかのときの状況で、対外的独立不可侵という目標にたつて一定の政策決定をした、とすれば、それを現在の状況に置きかえ、同じ独立不可侵の目標を、異なつた状況において追求していくためには、どんな手段、どんな政策が適合的かを考えていくことが、ほんとうに祖先の伝統に忠実な道ではないか——というわけです。これは伝統の名において、従来の行きがかりや既成事実をズルズルとひきずられるような「現実主義」とも、また「御当代様の御物好き」、つまり勝手な思いつきによるアクロバティックな政策決定ともちがって、原則の貫徹と、転変する状況への対応という二つの問題の間に不連続を橋渡しをしていく考え方です。それはちやうど、象山が学問論のうえで、西洋学への突然変異的な転向をしないで、あくまで朱子学あるいは『周易』の考え方を原則としながら、それを現実状況のうえにたつて読みかえていこうとした、あの態度と照応しているように思われます。

▽整理してみよう。
・昔 目的∥対外的独立不可侵、状況∥鎖国が有効、手段∥鎖国・巨艦建造禁止
・今 目的∥対外的独立不可侵、状況∥鎖国は無効、手段∥巨艦建造による対抗態度の問題として重要なのは、（原則（目的）の貫徹）という点、（現実の状況への対応（手段）の柔軟性）という点である。目的においては堅固だが、手段については自在。

この態度は、別の言い方をすれば、ロマンに対する成熟した向き合い方だといえる。ロマン（夢、理想、目的）は、リアルな状況によつて影響を受けるが、成熟したリアリズムは、むしろ、このロマンを捨て去ることなく、保持しながら、リアルな状況に対応しようとする。現実はそのなんもんじゃないといつて、ロマンを次々に捨て去る（大人）は、じつは幼稚なリアリストにすぎない。ロマン／リアルという対比は、主観／客観という対比でも捉えることができる。ロマン／リアル、主観／客観、目的／手段という対比は形を変えて、いろいろな問題の中に出現する。

⑧ ●ですから、文久年間、象山がすでにはっきり開国の主張にたつてからのちの論理をみましても、彼はけつして、天下りの的に、観念的に鎖国を排し、開明主義にくみしているのではありません。鎖国論の動機にひそむ◆7ある正しさを認めている。ただこういうのです——鎖国なら鎖国でよい、かりに鎖国という目的を設定してみます。すると、その目的が実現されるための現実的な条件は何であるかという考察が出てきます。現在の具体的状況のなかで、鎖国という目的を実現するにはどういふ手段が考えられるか、さらにその手段を政策としてとつた場合、そこからどういふ現実の結果が導き出されるか、ということも検討してみる。これは鎖国という目的自体に対する善悪の価値判断を一応たなあげして、冷静な分析と予測の問題として考えられること

です。そうするとどういふ帰結になるか。結局、「終始御鎖国にては御国力御技量も遂に外に劣らせられ、遂に御鎖国も遂げさせられざるに至り申べく」ということになり。つまりいわゆる鎖国政策の実行によつては、鎖国という肝心の目的さえも実行できなくなる、というわけです。これは文久二年末の松代藩主、真田幸教への上書からの引用ですが、目的と手段の關係の比較考量という観点は、さきの天保十三年の幸賢への上書から引き続き貫かれております。

▽⑦の判断の補強。ただ、ここでは、鎖国は目的になっている。鎖国時代を目的とし、鎖国を実行し続けられ、鎖国という目的が達せられない、という論法で、結論を導いている。目的と手段は、連続する階層關係になっているということも理解しておくこと。例えば、平和(目的)―鎖国(手段)という關係を一次元下位(はずらせば、鎖国(目的)―巨艦建造禁止(手段)というふう)に、より下位の手段に対して、(鎖国)は目的となる。また、逆に一次元上位にずらせば、すべての人間の幸福(目的)―平和維持(手段)というふう)に、平和を手段と位置づけることもできる。目的と目標を使い分け、平和(目的)―鎖国(目標)―巨艦建造禁止(手段)というふう)に階層化する場合もある。

◆問7「ある正しさ」とはどのような正しさか。

それが意図する目的においては正しい、ということである。その目的の内容を具体的に書けばいい。

【解答例】「日本の対外的独立不可侵を維持しようという目的の正しさ。」

◆【主張】象山のように「思考せよ」(知性的判断の力)

⑨ ● こうした一定の目的に対して適合的な手段を選択したり、あるいは、一定の手段をとることから生じうる派生的な効果を考慮して、それが目的そのものをそこなうことになるかどうか、をたえず考量しながら政策決定を行うということは、いうまでもなく冷徹な知性的判断の問題であります。激動する状況に対してのぼせあがらないで、こうした知性を使用して判断する指導者が、政治的に「成熟」した指導者ということになります。国際政治をどこまでもリアルに考察した象山は、したがってまた、いわゆる権力政治というものがけつして物理的な力關係だけで左右されず、かえってそこでは右のような政治的知性が大きな役割を果たすことを洞察していました。「寡の衆に敵すべからず、小の大に敵すべからず、弱の強に敵すべからざるは其通の事に候へ共、智謀次第は弱を以て強を制し、小を以て大を使ひ、寡を以て衆を馭し候事も亦常事にて、兵道経略は唯智謀如何に御座候様奉存候」(安政五年三月、星巖宛書簡)。象山が国力こそ国防の基礎だと盛んにいっているのは、国力というものを軍事・経済・政治・民情といった総合的な力としてとらえているからで、だからこそ、「古今覇者の国、其の上、富むといえども、下は必ず虚なり。其の兵強しといえども、民は必ず弊す。其の効を見る、あるいは速ならんといえども、其の流禍久しきに至つて已まざる所以なり」(「正誼館記」原漢文)というのです。ここでは象

山は明治型の富国強兵の先駆者どころか、むしろその行く末の洞察者であったときえいえるでしょう。ともかく象山の政治的状況に対する対応がどんな場合にも【読3】一貫した主知的なりアリズムの思考法によって裏づけられていることは、以上のべたところからおわかりになると思います。

▽激動する状況でこそ、冷静な知性的判断が大きな役割を果たす。これが結論である。〈感情的な判断・物理的な力關係〉がこれに對立するものである。引用を見ると、二一世紀のアメリカが浮かぶ。上は富んでいるが、下は貧困。武力は世界一だが、人々は飢え、飢えた者から順に軍隊を志願して死んでいく。武力でアフガンやイラクの体制を破壊したが、その災いは長く続く。〈感情的な判断・物理的な力關係〉で政治的選択を行うと、間違う。泣いたりわめいたりする政治家に票が入る日本国もひとつではない。

■読解問題1「政治は「可能性の技術」だ」とあるが、「政治的リアリズム」の立場から、「現実主義」はどのような点で問題なのか、まとめなさい。

ここである「現実主義」とは何か。理想はそうかもしれないが、現実はいかにないという論法で、理想がだめなら現実を選択するしかないと思定に考え、既成事実にはただ追従していくやり方である。

では、「政治的リアリズム」とは？ 問5で見たように、流動する状況に対して、現実的にかつ柔軟に対応しようとするものだった。その際、同じ根拠に基づきながら対立する可能性が、同時に想定されることを見定める。「政治的リアリズム」は、目的は保持しながら、その対立する可能性を制御していかうとする。

対立点は何か。
「現実主義」が、理想がだめなら現実を選択するしかないというように、選択肢を一つしか考えていないのに対し、「政治的リアリズム」は、対立する方向へ発展する可能性をふまえている。また、「現実主義」が目的をすぐに放棄するのに対し、「政治的リアリズム」は目的を放棄しない。

解答の型は、「政治的リアリズム」はくだ。「現実主義」はくた。「現実主義」はくたという点で問題だ。」というかたち。

【解答例】「政治的リアリズムは、状況の中に対立する可能性をふまえ、目的を保持しつつ、より望ましい可能性を追求する技術であるが、現実主義は、状況を固定的に捉え、目的を放棄して、現状に追従する。政治的リアリズムの立場からは、現実主義は、現実を固定的にしか認識しないために、結局、望ましい状態を実現できない点で問題である。」

■読解問題2 筆者は政治における「目的と手段」の関係を、象山の場合を通じてどのように考えているか、説明しなさい。

象山があの時代に開国についてどう考えたかをまとめて示し、次に、それを一般化した筆者の考えを示す。

(象山)「かつて対外的独立不可侵という目標にたつて一定の政策決定をした、とすれば、それを現在の状況に置きかえ、同じ独立不可侵の目標を、異なった状況において追求していくためには、どんな手段、どんな政策が適合的かを考えていくことが、ほんとうに祖先の伝統に忠実な道ではないか」⑦

(筆者)「こうした一定の目的に対して適合的な手段を選択したり、あるいは、一定の手段をとることから生じうる派生的な効果を考慮して、それが目的そのものをこなうことになるかどうか、をたえず考量しながら政策決定を行う」⑨

【解答例】「象山は、それまで、対外的独立不可侵という目的のために鎖国という手段を取っていたことに理解を示している。しかし、当時の状況では、同じ独立不可侵という目的を達成していくためには、開国という手段しかない」と主張した。筆者は、この考え方に倣い、目的そのものを達成できるかどうか、を考え、より適した手段を選択したり、その手段をとることがどんな結果を生むかを考慮したりしながら政策決定を行うべきだと考えている。」

■読解問題3 「一貫したリアリズムの思考法」とあるが、幕末の思想家である象山の政治的思考方法を通して、筆者は現代の政治にどのような問題を投げかけていると考えるか、まとめなさい。

象山の政治的思考方法から見ると、現代は間違った政治の考え方がなされている。筆者はそのことに対して批判的であると考えられる。

まずは、このように大づかみにつかんでおく。その上で、「象山の思考から見ると、現代の政治は、くという点で間違っていると批判していると考えられる。」という型を考える。あとは、傍線部を肉付け。これが作業の内実だ。

本文の中で、否定的に書かれていた思考法を書き出してみよう。

③それは特定国を好きだとかきらいだとか、憎んでいるとかいい感じをもっているとかいう感情の次元とはまったく別なのだ。

④いずれにしても、これは政治的「相手」に対する固定した期待感、相手が必ずこういうふうに出てくるだろうという固定した期待感であります。流動する国際政治においては、固定した期待感にもとづく判断ほど危険なものはない。

⑤それは、理想、あるいは建て前はそうだけれども、現実……云々という論法で、現実と理想とを固定的に対立させ、既成事実にただ追従していく「現実主義」とは縁

- 11/12 -

もゆかりもないものです。

⑦ところがその肝心の政策の目的が忘れられてしまつて、法度を守ること自体が政治的伝統であるということになると、これは手段を目的ととりちがえることになる。

⑦これは伝統の名において、従来の行きがかりや既成事実にズルズルとひきずられるような「現実主義」とも、また「御当代様の御物好き」、つまり勝手な思いつきによるアクロバティックな政策決定ともちがつて：

また、次の箇所は、現在、その裏返しの認識が横行していることへの批判になっていると読めるだろう。

⑨いわゆる権力政治というものがかけてつて物理的な力関係だけで左右されず、かえつてそこでは右のような政治的知性が大きな役割を果たすことを洞察していました。

⑨国力というものを軍事・経済・政治・民情といった総合的な力としてとらえている。

【解答例】「冷静に状況の中から対立する可能性を見出し、また、手段を固定的に捉えず、望ましい方向を目指そうとするのが象山の思考法である。しかし、現代の政治は、国際政治でも国内政治でも、感情的なものに基づいた固定的な党派対立や、従来の枠組みがあるいは既成事実を引きずられる現実主義、また、その結果もたらされる総合的な見通しや目的設定の欠如に陥っている。筆者は、このような、一貫した知性的な思考法が欠落している現状を批判していると考えられる。」

■二百字要約の修行

◆印の見出しを参考にして書いてみよう。(問題集の解答冊子に解答例あり)

■論述への挑戦

問1。現在の具体的な政治のやり方を挙げて、本文の視点から批判せよ。国際、国内、国政、地方行政、どれでもかまわない。八百字以内。

問2。歴史的な事例を挙げて、本文の議論と照らし合わせて考えるとどこを述べよ。八百字以内。

- 12/12 -